
Missin' You (It Will Break My Heart)

小室 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i s s i n ' Y o u (I t W i l l B r e a k M y
H e a r t)

【Nコード】

N 4 0 8 3 S

【作者名】

小室 仁

【あらすじ】

大好きなアーティストの歌の自分勝手なイメージ短編、第五話。

この世には、生まれながらにして、
こんなに綺麗な人間もいる。

教室の窓から注ぎ込む太陽の光が、
まるでスポットライトのように、その子を包み込んでいた。
一人だけ浮き上がっているかのように、とう子の目の中に飛び込んでくる。

今は数学のテストの時間。

クラスメートたちは全員下を向いて、問題用紙と奮闘している。
辺りに響くのは鉛筆が紙をこする音だけだ。

テストを監視する担任として、

とう子は教室の中を見回す振りをしながら、その子を見つめる。

教室の一番後ろの席に座っている彼。

俯き加減のせいかな、長めの前髪が目にかかっている。
頬に影を落とすような長いまつげ。

ずっと通った鼻筋、問題を読んでいるのだろうか、
形の良い唇はかすかに動いている。

高校2年生の中では背も高い方に入るだろう。

制服の肩は広く、少年から大人の男になりつつあるのが、
教壇のここからでも見て取れる。

同じ年齢なのに、うちの息子とは大違いだった。

見合いで結婚した夫は背も小さく、
体型も若いころからずんぐりむっくりとしていて、
顔つきは穏やかだけれど、男としての魅力はまるで無かったのが、
とう子との間に生まれた息子に、そのまま遺伝してしまった。

とう子は自分の手を見下ろす。

丸々とした、色白だけが取り柄の指には、
結婚指輪が食い込んでいる。

いや、息子の器量が悪いのは、
夫ばかりのせいじゃない。

自分だって、夫と似たような体型なのだ。

それに、決して自分が美人とは言えないのは、
重々分かっている。

そして最近、中年という年齢のせいもあって、
ずんぐりむっくりに磨きがかかってきているのだし。

それに、こんなに美しい子は、

長年高校教師をしていても、出会ったのは初めてだった。

大概が、高校生の男子などというものは、

ホルモンの分泌が盛んで生意気な、思春期坊主ばかりで、
可愛いと思うことはあっても、こうして我を忘れて見とれてしまう
ような、

美しい子はいない。

20年教師をしてきたとう子も、初めての体験なのだ。

残念だな。

とう子は心の中で呟く。

その美しい教え子は、今週一杯でこの学校を去っていく。
父親の仕事の関係で、家族でアメリカに移り住むらしい。

彼の担任になってからの一年半、
毎日ひそかに憧れ続けた、

この美しい教え子の顔が、もう二度と見られなくなるのだ。

テスト終了まで、あと10分なのを腕時計で確認して、
またとう子はさりげなく、彼に目を戻した。

完璧な美。あと数年したら、彼はますます男らしく、
逞しくなるに違いない。

一体彼は、どんな女を愛するようになるのか。
その腕に抱きしめられて、愛を囁かれる相手は、
一体どんな人なんだろう。

とう子は目を伏せて、口の端で苦く笑った。
きつと彼に劣らず、若く美しい女なんだろう。

未来への希望に満ち溢れ、若さに輝いているような。
アメリカに行くのだ。もしかしたら、白人碧眼の金髪美人かもしれ
ない。

とう子は自分の鈍く銀色に光る指輪を指で撫でる。
ぷっくりとふくらんだ指に食い込む、異質の硬さ。

年齢も年齢ながら、しみじみと、
自分は人間としての大半が終わってしまったのだと、
指輪を触りながら、思った。

そして、もう一度、その美しい彼に目を戻した。
その若さ。彼の人生は、まるまるこれからなのだ。

不意に、とう子の胸を強烈な寂しさが襲った。

もうすぐ、この彼の顔も見られなくなる。
どうしようもなく寂しかった。

彼がとう子の生活から去っていくことで、
とう子の中の何かがまたひとつ、終わるような気がした。

「終了！」

とう子は気を取り直して、教室中に声をかける。

おーというようなざわめきと共に、
静まり返っていた教室が動き出す。

「解答用紙は、後ろから前に送って集めること！」
とう子の声に、美しい彼が目を上げてとう子を見る。
とう子は咄嗟に目をそらして、何気ない風を装った。

彼が去ってしまったら、

彼が自分をこうして見ることもなくなるのだ。

とう子は胸がかきむしられる様に、悲しかった。

放課後、誰もいなくなった教室。

とう子は、教壇の引き出しに忘れた書類を取りに来ていた。

そして、ふと目を上げて、

あの彼の席を見る。

彼の幻を見たような気がして、

とう子はそのまましばらく佇んでいた。

ガラリと音がして、教室の戸が引かれる。

とう子のはつとして目をやると、そこにはあの美しい彼の姿があった。

「あれ、先生、まだいたんだ」

彼はとう子に声をかけて、自分の席に歩いていく。

胸に思い描いていた彼の出現に、動揺している自分の気持ちを精一杯隠すと、

とう子はいつもの担任の声で言った。

「忘れ物？」

「うん」

自分の机の中から、英和辞書を取り出して、

「これないと宿題出来ないから」

彼は美しく笑って、とう子を見た。

とう子もつられて笑う。

「そう、気をつけて帰りなさいよ」

「うん」

彼は教室から出て行くとして、ふと足を止める。

「アメリカにも、日本人ってたくさんいるのかな？」
彼が言った。

「そりゃ、いるでしょう」
とう子が答える。

「そっか、なら良かった」

肩をすくめる彼に、今度はとう子が訊く。

「どうして？」

彼はとう子を見て肩をすくめる。

「俺さ、派手な外人の女とか、苦手なんだよね。」

先生みたいな、料理が得意そうで控えめな奥さんって人がタイプだから」

彼はまた花のように笑って、そして教室を出て行った。

とう子は驚いて、彼を見送った。

しばらくして、とう子は自分が泣いているのに気がついた。
誰もいない放課後の教室で、とう子は声を殺して泣いた。

どうして、私はもっと若い頃にたくさん恋をしなかったんだろう。
こっという痛みをもっと前からたくさん知っていて、慣れてさえいれ
ば、

今こんなに辛くはないはずなのに。

中年の私が、高校生の教え子を好きになっちゃってさ。
なんて、誰かに笑い話で言えてさえいたかもしれないのに。

料理の得意な控えめな奥さん。

とう子は泣き止んで涙を拭いた。
そうだ、それが私。

見合い結婚だけれど、真面目な夫に一人息子もいる。
彼のように美しくないけれど、夫も息子も大事な自分の家族だ。

とう子は教室から出て、職員室に向かって廊下を歩き始めた。
廊下の窓から外を眺めると、あの綺麗な彼が校門から出て行くところだった。

いつか、彼が私の事をすっかり忘れてしまっても、
私は彼の事を、いつまでも思い出すのだろう。

とう子は窓から顔を戻すと、小さく頭を振って職員室に向かって歩きながら、

今夜の夕飯を何にしようかと、無理やり考え始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4083s/>

Missin' You (It Will Break My Heart)

2011年4月17日15時05分発行